



TITLE:

白鳥博士に思出

AUTHOR(S):

羽田, 亨

CITATION:

羽田, 亨. 白鳥博士に思出. 東洋史研究 1942, 7(2-3): 150-154

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138833>

RIGHT:

白鳥博士の思出

羽 田 亨

暮から春にかけて親しき交りの老弱、さては骨肉までも頻々たる訃音に悲みの絶える間もなく、いつまでも調はぬ寒々した氣候に呪を寄せて、熙々たる春光を待ちわびた三月の末日、またもや白鳥博士の危篤、ついで永眠の悲電に接した。まさかとは思ひながらもなほ何かの間違ではないかと幾たび電文を読み返したことであつたか。「この地氣候快適氣分も宜しく云々」のいつもの達筆をふるはれた湘南の便りに接してからまだ一月も経たぬ時ではあり、東都の友人たちからの報道にも、博士の日増に健康を回復せられつゝあることが傳へられてあつて、かゝる悲報を受けようとは夢にも思はぬことであつたからである。併し同日つぎつぎに齎される諸方の通報は、疑つて見ようにも見方もないものばかりで、巨星地に隕つの恨を懷いて、たゞ

悵然たる外はないのであつた。思へば明治三十七年始めて博士の訃咳に接してから、四十年にも近い歳月を通じて不斷の教導と激勵とを蒙り、ひたすら學究の途を辿るを得た自分にとつては、先生に對する追想は追慕と共に綿々として盡きぬ。これを詳かに書き綴ることは別の機會を選ぶこととして、こゝには編者の帯に應じて、たゞその學問を中心に二三の思出を記して見よう。

白鳥博士が東京帝國大學の講壇に立たれるやうになつたのは、明治三十七年からのことである。この年文科大學の學科規定に大改正が行はれ、從來の九學科を新に哲・史・文の三學科にまとめ、史學科に國史學支那史學及び西洋史學の三專攻科目を置くことになつた

のであるが、丁度この前年歐洲の留學から歸朝して、在來の學習院教授を奉職して居られた白鳥博士は、帝國大學教授を兼ねて、支那史學に屬する講義を始められることになつたのである。だからこの年史學科に入學した自分は、博士の大學に於ける最初の講義に出席する機會を得たのであつた。當時我が國に於ける支那以外の東洋史學の發達の有様を追想すると、一般にはまだ幼稚な情態で、眞に深く研究の境地に突き進むで居つたとは認め難い時代であつたが、獨り博士の學問は此間に於て嶄然として群を抜き、匈奴の種族の研究、契丹女眞西夏文字考、烏孫に就いての考などが相ついで發表せられ、匈奴及び東胡民族考や烏孫考は獨文で歐洲學界に提示せられ、低調であつた我が東洋學界に於てよりも、却つて西儒の間に嘖々として名聲を傳へられたやうな有様であつた。その博士が歸朝後間も無くして始めて大學の講壇に立たれることになつたのであるから、學生の期待は非常に大きく、獨り史學科に屬するものばかりでなく、哲學文學の徒も聲譽を聞き傳へて講席に集り、廣い何番かの教室も常に空席なく立つたまゝで聽講するものも少くなかつた。初めての

講義題目は支那の北部に據つた民族の歴史と、歐人の著はした東洋史籍解題との二種類であつたが、史籍解題の方は別に時間を取つて講ぜられたことはなく、初めの講義中に於てこれに言及せられる程度に過ぎなかつた。その講義の中でかゝる題目を特に選定した理由を述べられたことがあるが、それによると、此等の民族は古來亞細亞の歴史を支配したもので、その研究は亞細亞史を知るのに極めて重要であるに拘はらず、我が國に於てはこれが閑却せられ、歐人の研鑽に委ねられてあるのは遺憾であるから、先づ之が闡明に従事しなければならぬといふのであつた。我が東洋學を振興して、世界學界の水準、否その以上に發達せしめなければならぬといふのは、夙くから博士の念願とせられたところで、此の頃から後四十年に近い生涯を通じて自から斯學の研究に勇往邁進せられたことは更めていふまでもなく、常に後進を誘導鼓舞してこれが達成に不斷の努力を用ゐられたものである。かゝる意圖の下に講壇に立たれた爲か、右の題目を掲げられたに拘はらず、その内容は頗る多岐に亘り、此等諸民族の史實を概括的に講述せられたのでは無く、却つてこれに縁

故のある諸種の問題に關して古今の學說を汎く取り上げ、その紹介批評及び獨自の見解を明快に且つ非常な熱意を込めて披瀝せられ、聽講者に對して研究の興味を呼び起すと共に、その方法を教示せられる行き方であつた。茲に於てか動もすれば平板な記述的講授に墮する東洋史の講義が、深遠なる研究の發表として、また研究に進むべき道しるべとして授けられ、學生をして甚大の興味と尊敬とを以て聽講するに至らしめ、この後の斯學の發達の上に大なる影響を及ぼすことゝなつた。我が國現在の東洋史學の隆昌については、博士と共に四五同列先達の貢獻を牢記しなければならぬにしても、博士によつて逸早く開拓の蹊の振上げられた功績は、永く稱へられねばならぬことである。

尤も講義の内容は随分六つかしく、問題そのものゝ重要さも沿革も知らない學生に對して、何の頓着もなしにクラブロートやレミューザ以下現代に及ぶ大家の所説を、滔々として紹介批評せられるので、少からず面喰つて茫然たることも屢々であつたが、それに拘はらず聽講者はその熱意と新味とに惹きつけられ、教室はいつも満員をつゞけ、時たま揭示板に本日休講が貼

り出されると、柄にもなくがつかりして引上げる有様であつた。

博士が東洋史學の研究に従事せられるやうになつたのは、明治二十三年大學を卒業して學習院教授に任ぜられ、間もなくそこに設けられた東洋諸國史を擔當せられるやうになつてからのことであると屢々博士の追想談に於て聞かされたことである。當時は前述のやうにまだ我が國に於ける斯學の草創時代であつたので、これが研究には嫌應なしに先づ以て西儒の學說に通ずる外はなかつたのである。ところでこの學問に於ける西儒の特色は、廣く東洋諸民族の言語に通じ、その史料を利用すると共に、別にこの知識を以て支那の記錄に見える所關の記事を解釋し、參酌對照して問題の解決に資する點にあつた。かゝる學風が此の如くにして東洋史の研究に進まれることになつた博士の學問に影響を及ぼすことになるのは當然のことであつて、東洋諸民族の言語の研究と利用とが、博士の學問の大なる部分を占めるに至つたのは、その由來するところこゝにありと言はねばなるまい。此の如くにして西儒の用

ゐた方法を以て東洋諸國史の研究に進まれる間に、僅々數年にして早くも獨自の見解を立て、世界の東洋學界に重要な地歩を占める基礎を固められ、遂に明治三十二年には前にも述べた獨文の匈奴及び東胡民俗考を羅馬の萬國東洋學會に提出し、ついで同三十五年には歐洲留學中、ハムブルグの同學會に於て自から獨文鳥孫考を朗讀して重ねて聲譽を博せられることになつたのは周知の事である。

この頃から以後その生涯を通じて續々發表せられた幾多の研究や、また講義の内容などについて細かに述べることはこの短篇の目的ではない。たゞこれ等を通じて看取し得る特徴として、その所論が常に言語の上に大なる關聯を有することゝ、その論述に於て驚嘆すべき推理の透徹が、輝かしくも發揮せられて居ることとを特に擧げておくべきであらう。單に豊富な知識を以て言語資料が取扱はれてあるだけではなく、その取扱に當つて到底常人には及び難い推理力を以て、複雑な現象の間に關聯を求め、所縁を究明せられたことは實に博士獨特の長所として、他人の追隨を許さぬところと言ふべきである。

我が國東洋史學の開拓者としての白鳥博士を追想するにつけても忘れることの出来ないのは、博士が獨り講義に於て論述に於て後進を誘掖せられたのみならずこれが發達を企圖して學會や研究機關を設立せられた功績である。博士の東京帝國大學に奉職せられた始めの頃には、前に述べた如く一般に東洋學界はまだ幼稚な階梯に在つて、碌に研究機關も發表機關も整つてゐなかつたので、博士はまづ亞細亞學會を組織し、同志を糾合して斯學の發展に資する途を開かれ、ついで明治四十一年に至り、當時有力な團體であつた東洋協會に調査部を開かせて、亞細亞學會をこれに導入し、この部の事業の一として學術報告を發刊することになつたが、同四十四年一月から更にこれを改めて東洋學報を發行することゝなつた。この雜誌は今もなほ續刊せられて誌齡二十九に及び、初號以來今日に至るまでの間に、獨り我が國のみならず、世界の東洋史學の發達に寄與したところ莫大といはねばならぬ。この外にも明治四十一年に滿洲鐵道會社をして滿鮮歴史地理研究事業を起さしめて、今に續く研究報告を發行せしめることになり、更に大正十三年岩崎男爵家に於て東洋文

庫が設立せられるに當つて、博士はその理事及び研究部長としてこれに關與せられ、殊に十四年官を辭せられて後は、研究に従事せらるゝ以外専念これが經營に力め、文庫の發展とその事業の上に、顯著な功績を残されたのは周知のことである。かゝる機關の設立やその事業の經營に當つては、衝に當るもの以外、想像も及ばない深刻な苦心の隨伴するのが常であることを思ふとき、博士が僅に許される惜しみても餘りある時間と心の餘裕とを犠牲にして、一途に學術發達の爲に取てかゝる煩雜な事に任ぜられた尊き心構に對して、深甚なる感謝を捧げなければならぬ。

四月十三日午後、東京雜司ヶ谷の博士の墓に詣でた。歛葬後間もない墓地の所在は、東洋文庫の岩井君から仔細に聽いておいたので、譯なくわかる積りであつたのが、目標として心得ておいた小路の眞中に聳えて居る筈の櫟の木が、あちらの小路にもこちらの小路にも同じやうに亭々と立つてゐるので、何れをそれと定め難く、汗を拭ひながら彷徨徘徊する間に、曾て博士と桑原博士との間に行はれた大宛國の都貴山城の位

置についての激しい論争の一節をふつと思ひ出しておかしくなつた。貴山城を水攻にして陥れたといふのを根據の一つとして、地勢上からこれをホーランドにあてると、そんな地勢は大宛地方の何れの都にも認められるところであるから、據とするに足らないといふのである。貴山城は兎も角もとして博士の墓地は容易にわからない。遂に我を折つて附近の茶屋について聞き合せて見ると、これはまた萬を以て數へられる墓域内の幽籍を掌を指すが如くに心得て居つて、その主婦が先に立つて案内をしてくれた。來て見れば先刻からその附近を何度か往來模索した櫟の若葉の蔭さすところである。白鳥庫吉墓と記された加藤博士の健筆の木標の下に、今は悲しくも博士の英魂は永遠の眠に就いて居られるのである。訪問の度ごとに莞爾として迎へてくれた温容に接する思で墓前に頷き、一世に卓立せられた學徳を今更に追想しながら、謹しむで冥福をいのり上げた。